

資料（講演記録）

「気になる子ども」の言葉と人間関係の指導法

—特別支援保育の充実に向けて—

Teaching Methods of Words and Human Relations for
"Children who Need Special Support"

-Enhancement of Special Support Childcare-

矢野 正

Tadashi YANO

要旨（Abstract）

本教育講演は、京都府八幡市教育委員会主催の幼稚園部会夏季研修会の記録であり、平成25年8月に実施されたものである。筆者が、講座を担当した。特に本部会では、領域「言葉」と「人間関係」に狙いを絞って研修を進めており、これまで嵯峨野書院発行の著書がある筆者に今回、白羽の矢があたったものである。

研修会当日は、教室が満員になるほど盛況であり、質疑応答も時間を超えるまで行われた。部会の先生に、懇切丁寧に本講演記録を作成していただいたので、資料として掲載する。

キーワード: 保育内容研究、研修会、言葉、人間関係、インクルーシブ保育

I. はじめに

発達障害の支援は、「発達障害」を理解するところから始まる。子どもの支援は、「子ども」を理解するところから始まる。そして、「気になる子ども」の行動や背景を理解することが、もっとも大事である。



「LD児の保護者の手記1」（LD児は、現在40代）

LDだということが周りからは理解されにくいけれど、多くの不便さを抱えています。薬も飲み続けています。それでも生き生きと仕事をし、楽しみを持って生きています。20年かけてやっと周りからも認知され、当たり前のように生活ができるようになりました。

LDを理解するのは難しいとされていたが、「人と違っていても、このままでいいんだよ」、「好きだよ」という肯定的な態度で関わるだけでいいんです。見守るだけでいいんです。

周りに支えられているという気持ち、子どもを育てる一番の糧になります。

気になる子どもへの指導では、特に肯定的な言葉がけをたくさんすること、子どものせいにするのではなく、先生の指導を省みるように心掛けてほしい。

II. 特別支援教育/保育

1) 特別支援教育/保育とは…①一人ひとりの教育的ニーズを把握して、適切な指導を通じて必要な支援を行う。

②LD・ADHD・高機能自閉症等を含む障害のある子どもを支援する（特別な教育的支援を必要とする子どもを支援する。）

2) 発達障害とは…LD（学習の課題）・ADHD（行動の課題）・PDD（広汎性発達障害）、高機能自閉症、アスペルガー症候群など。

現在、通常学級に6.5%…クラスで2・3人程度いる可能性がある¹⁾。

3) 支援のための大切な2つの視点

(1)「発達障害を分類し、レッテルを貼る」のではなく、「理解し、働きかける」というのが、福祉・教育の立場である。

(2)「障害がある」「障害がない」は『連続』している。

子どもを発達障害のある子どもとない子どもに、果たして分けることなどできるのだろうか。誰だって、少なからず発達の障害をもっているのではないか。保育者は、その子に合った指導を展開する必要があるのではないだろうか。

◎親の会で話題となること(1) (ズバツというわよ！耳の痛い話1)

- ・先生に相談すると「こんな程度の子どもなら、いくらでもいるよ。」「あなたは自分の子どもにレッテルを貼りたいの?」「親の育て方が甘い。」「親の愛情が足りない。」など。
- ・先生方への不満…教育のプロなのに、発達障害について知らなさすぎる。また、知らないことを認めず、知ったかぶりをされる。逆に張り切りすぎて学んだばかりのやり方を押しとおし、本人を見てくれない。
- ・障害名を告げても「お母さんは心配のしすぎ。〇〇くんは普通ですよ。」と慰められる。「先生が困らない」という視点で見て、「本人が困っている」ことをわかってくれない。40人の子どもがいるのに一人だけ特別扱いには出来ない。など、よく聴く話です。

◎親の会での話題(2) (ズバツというわよ！耳の痛い話2)

- ・本人への親しみを込めたつもりのからかいが、本人を深く傷つけていたり、本人への適切なサポートだと思ってして下さることが、かえって周りの子の反感を買ってしまったり。好意がアタになってしまうこともたびたびあるようです。
- ・保護者は自分が混乱し、困っている思いを先生にぶつけてしまいます。「なんとかしてほしい」長年付き合ってきた我が子でさえうまく行かなかったことを棚に上げて、「先生は教育のプロだから、もっと熱心に勉強して当たり前。学校の中のことは先生に任せたい。」という思いを強く持っておられる方もたくさんいらっしゃいます。期待が大きすぎるから、不満がいっぱい出てきてしまう。いくら教育のプロでも、我が子に関わってくださるのが1年目なら、初心者マークです。
- ・子どもの個性を認めてほしいとお願いする保護者には、同時に先生の個性も認め、その先生の良さが最大限生かされるようにと話します。

◎親の会での話題(3) 先生方へのお願い

- ・親の心理的サポート

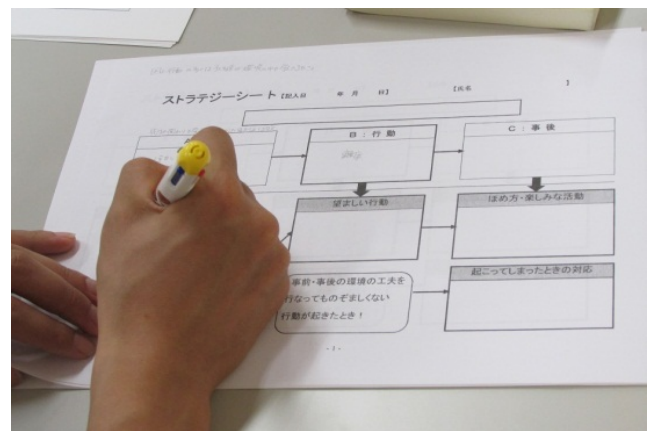
「難しい子育て、よく今まで頑張ってきたね。これからは一緒にがんばろうね。」というような言葉かけを、保護者にしたい。

- ・障害名は、子どものほんの一部である。
LDといってもいろんなタイプがあり「違い」がある。
- ・先生、うちの子を嫌いにならないで。(うちの子を悪者にしないで。悪いところがあっても、好きでいてほしい。)
- ・先生、うちの子を見ていて。
- ・先生、うちの子に辛い思いをさせないで。(うちの子を理解してほしい。)
- ・その上で、はじめて我が子に力をつけてほしい。
- ・そして、末永い見守りをしてほしい。



◎困った行動は改善できる

- ・困った行動の多くは、子どもたちが環境の中で学んできたことです。なぜそのようなことをするのか、耳を傾けてみる。
- ・「子どもの障害」「親の養育」「学校の対応」など悪者探しをするのはやめるようにすべきである。重要なのは、周りの大人たちが子どものために何を今すべきかどうかということである。
- ・困った行動への取り組みは決して簡単なものではない。しかしながら、何人かが力を合わせれば乗り越えることは可能である。したがって、今日からできることを探していきたい。そのためにストラテジーシート(写真)をぜひ活用しよう。



◎特別支援教育の残された課題：小学校における特別支援教育の基本と今後の方向について

- 1) 発達障害の教育的可能性の見方が広がった
発達障害と健常の間は、連続的である。
障害とはその状態や周りの環境次第で、落ち着いて学ぶことができる可能性がある。
- 2) どの子どもにも教育の手を届かせる
幼児期から高校・大学まで障害があろうと学べるようにする。どの子どもも置き去りにしない。
困難な事情のある子どもへの支援を広げる。必要なら個別の援助や補習を行う。
- 3) 障害に応じた援助に手だてがある
障害とは個性の有り様だけれど、援助を必要とする。
障害の種類や程度に応じて、援助の手だてが工夫できる。
障害のある子どもへの援助は、健常な子どもへの援助にも役立つ。
- 4) 障害のある子どもが放置されたまましていると問題が悪化する
障害に起因する問題に加えて、二次障害が起こるものである。
思春期に入り、当人の悩みが深刻化する。
問題が深刻化することを防ぐために、家庭と学校の連携が役立つ。
- 5) 特別支援学校をセンター化する

障害ごとの教育と、障害の重複・重度化に応じる。

指導の専門性を上げる（特別支援学校教諭免許の取得を推奨する）。

地域の特別支援教育の中心となって、特別支援を推進する。

6) 特別支援学級と通級学級などを組み合わせる

特別支援学級での指導者のための研修を充実する。

特別支援学級と普通学級の交流を広げる。通級学級の授業の方法を活用する。

7) 通常学級で障害のある子どもを含めた指導を強化する

軽度な状態の発達障害の子どもは通常学級に在籍し、援助の元で学習が可能である。

やや重い障害の子どもでも保護者の意向により通常学級にいる場合もある。

通常学級の担任が障害のある子どもの指導の仕方の研修を受けるようにする。

指導にあたり、助言をもらえる専門家との連携を図る。

8) 障害のある子どもを世間で育てる

障害のある子どもは障害に応じた教育を受け、同時に世間で生きるすべを知る。

世間の暮らし方は世間の中に小さい内から生活する中で身につく。学校もまた生活の一部である。

9) 障害のある人が一緒に生きられる社会環境を作る

長い人生のどこかで大部分の人は障害を持って生きようになる（高齢者の多くは、障害がある）。

障害を抱えていても、成人期に至るまで生き、仕事を持って暮らせるようになってきた。

道具を増やしたり、支援の手立てを得やすくするなど、障害のある人が生活しやすい環境をつくる。

障害のある人の才能を、最大限に引き出すようにする。

障害のない人が障害のある人との付き合い方を覚える機会を増やしていく。

10) タフな知性と感性を育てる

学校の勉強はもっと広い人生の勉強の一部である。受験参考書に書いてある以外の勉強もしてこそ、社会の中で生きた学力となる。

タフな知性・感性・体力を身に付けるには、異質な発想の他者と出会い、共に活動することが効果的である。障害のある子どもや外国人などが、その機会を提供してくれる。

Ⅲ. まとめと総括

1) 課題解決に必要なものは「予算」「時間」「理解」である。

新しいインクルーシブ社会を目指していきたい。

2) LDとは、その子ども一人ひとりの学習の困難性であり、学習の仕方の違いがある。

3) 障害とは、理解と支援を必要とする個性である。

4) “If children cannot learn the way we teach them then we must teach them the way they learn.”

私たちの教え方で学べない子には、その子の学び方で教えなさい。

5) 典型的なLDや自閉症の子どもへの理解が多くの子どもの理解につながる。健常者を理解することにもつながる。



- 6) LD、ADHD、自閉症などの子どもが理解される社会は、誰もが理解される社会である。
- 7) LD、ADHD、自閉症などの子どもが過ごしやすい社会は、誰もが過ごしやすい社会である。
- 障害をもった子どもをケア（care）することによって、さらに学級やクラスの支援になる。

IV. 講演・研修をとおして、参加者からの感想・意見

- ・さまざまな発達障がいの特性や、個に応じた指導・援助など詳しく学ぶことができた。特に、障がいの特性を知ることが、指導の手がかりとなるとともに、他の子どもにとっても理解しやすくなることも学ぶことができた。
- ・子どもの困り感に寄り添い、丁寧な言葉がけをすることや、自己肯定感がもてるようなかわり、子どもの可能性を信じ、伸びしろに光を当てるような支援をしていくことの必要性について考えることのできた研修会であった。
- ・保護者への心理的なサポートについても考えるよい機会となった。
- ・子どもの今を見るだけでなく、社会人として生活する姿を見据えた指導の必要性を学ぶことができた。
- ・ストラテジーシートの活用方法について、具体的に知ることができた。
- ・インクルーシブ教育は、今、八幡市においても取り組もうとしているところである。障がいをもった子どもたちだけでなく、共生する仲間として育ちあえるよう、今後の保育の中で活用していきたい。

注

本講演記録（八幡市教育委員会）は、法令などに準拠した資料に基づき「障害」の文字を使って、作成されています。

付記

本教育講演は、平成 25 年 8 月に行われたものである。

謝辞

八幡市教育委員会幼稚園部会長の八幡幼稚園園長、中村登志美先生をはじめ、貴重な機会をいただきました園の先生方にここに感謝し、謝辞に代えさせていただきます。

引用文献 (References)

- 1) 文部科学省(2012)「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について(報告)」平成 24 年 12 月 5 日